
羽足さんちのアンドロイド。

緑土雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽足さんちのアンドロイド。

【Nコード】

N5353N

【作者名】

緑士雄

【あらすじ】

拙作「少女機械プラチナ」(<http://ncode.syosetu.com/n1027n/>)の続編というか、同作のキャラクターを使ったショートストーリーです。

一話完結なので、気軽に読んでいただければ幸い。

お嬢さまと腕相撲

狂気の科学者・羽足林太郎博士の手により、住人全員がロボットに改造された島・曳鞠島。はたりんたろう ひくまりとう

博士の娘で唯一残された生身の人間・羽足乃麻はたりのま、そして彼女を守るために造られたアンドロイド書生・日柄千明ひがらちあきの二人は、今日も何も知らないロボット島民たちと歯車的で奇々怪々な日常を送っているのであった。

「……退屈だわ」

「げっ」

「何が『げっ』、なの千明」

「いやその」

それまで読んでいた分厚い洋書を置いて、乃麻はその黒目がちの瞳で千明を睨め付ける。

「もう一回言っわ。『退屈だわ』」

「は、はい、そうですか」

「……で？」

「え？」

「私が退屈、と言っているのよ？ あんたも居候の身なら、少しでも主人の無聊を慰めようとは思わないの？」

「あのお嬢さま、僕は居候じゃなくて、書生です」

「どちらでも同じよ。とにかくなんとかしなさい」

うつ、やっぱりこうなるのか。内心そう呟いて、千明は肩を落とす。

「すみませんが、僕はそろそろ夕飯の支度をしよう……」

「解ってないわね。ただ生理的欲求が満たされるだけでは、人間は真に充足することはないのよ。聖書バイブルに『人はパンのみにて生きるにあらず』とあるのを知らないの？ それだからあんたはいつまで経

「つても機械人形なのよ」

「うう……」

「まあいいわ、千明」

「は、はい」

「腕相撲をしましょう」

「……え」

思いもよらなかった言葉に、千明はその場に硬直した。

腕相撲。

腕力を競う人間の遊戯の一つ。

つかみ合った相手の腕を、先に押し倒した方の勝ち。

そんな基礎的情報が、矢継ぎ早にその電子頭脳コンピュータにスパークする。

そう——いや——だが——え？

「何を呆けてるの。腕相撲よ、腕相撲。退屈しのぎにはまあ悪くないでしょう？」

するり、とその袖から、乃麻のか細く真つ白な腕がのぞく。

そう、彼女は確かにスポーツが得意ではあるが、その華奢な体型から見れば解るとおり、別に際だって腕力に優れているわけではない。

それに比べて千明は、彼女に言わせれば機械人形——それも羽足博士が腕によりをかけて造り上げた、他の島民たちロボットを遙かに上回る性能を誇る戦闘用アンドロイドなのである。一見小柄な少年、といったその身体には、岩をも軽々砕く剛力が秘められているのだ。

そんな千明と乃麻の腕相撲。結果など、もはや考えるまでもない。乃麻だって、そんなことは当然解っているはず。

なのに、なぜ「腕相撲」など言い出したのか。

千明は必死に、その電子頭脳をフル稼働させる。

いったい自分は、どうするべきなのか。

一、断る。

不可能だ。あの乃麻が、そう簡単に自分の言い出したことを引っ込めるはずがない。仮にそれを認めさせたとしても、その代わりとして、どんな無理難題を押し付けられるか解ったものじゃない。

二、適当に手加減して相手をする。

これも不可能。あの負けず嫌いの彼女が、手加減など認めようはずがない。「機械人形の分際でご機嫌取りとはいいい根性ね」だとかなんとか、理不尽な嫌みを言われ続けるに違いない。

三、本気で相手をする。

論外だ。下手をすれば、腕どころか上半身ごとねじ切ってしまう。

「えーと、えーと、あ、ああ……？」

ダメだ。どうしたってろくな目に遭わない。まさに万事休すだ。

千明はショート寸前で、頭を抱えて床にへたり込む。

「……腕相撲一つに何をそんなに悩んでいるのか知らないけど、」

そんな千明を見下ろしつつ、乃麻は澄ました声でのたまう。

「あんたの相手をするのは私じゃないわ」

「へ」

「お父さまの部屋から発掘した、腕相撲専用マシン『ミスター・アームストロング』よ……」

乃麻の座るソファの傍らには、いつの間にか低くうなりを上げる、ぶつとい腕の生えたエンジンが置かれていた。

「……不味いわ」

十分間にわたる死闘を制した千明はそのままメンテナンスルームに直行し、乃麻は一人、出前の夕食を口に運ぶのであった。

お嬢さまと腕相撲（後書き）

なんでんなもの作っただ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353n/>

羽足さんちのアンドロイド。

2010年10月8日15時27分発行